

# リーダーについて考えること

取締役副社長

畔柳 昇

Noboru Kuroyanagi  
Executive Vice President and  
Director

時代は転換期にある。日本は戦後50年間懸命にがんばって欧米先進国に追いつき、そしてひょっとしたら追い越すくらいに経済水準に至った。しかし、規制緩和や構造改革が叫ばれたここ数年で起きている変化は、一体だれが予想し得たであろうか。とくに昨年に起きたドラスティックな数々の変化は、城山三郎さんの言葉を借りれば、まさに明治維新、太平洋戦争に次ぐ「第三の革命期」とも言えるものである。まだ先だと思っていた21世紀もたった3年先である。時代の節目であり、世紀の節目である。変革が多く分野で進められているが、こうした動きは21世紀の日本をより豊かで明るいものにするための備えと考えたい。

変革や変化を進めていくには、リーダーのあり方やリーダーシップが最も大切な要素であることは言うまでもない。いつの世でもリーダーになることはできても、真のリーダーたり得ることは難しい。常に研究され、それに関するいろいろな書物も出ている。まさに永遠のテーマであろう。不透明な時代であるだけにリーダーのあり方は、国家はもちろんのこと、企業・集団・チームなど、組織の命運を左右する最重要なファクターとなってきている。もとよりリーダーやリーダーシップに「これだ!」というような一定の形はあるはずもない。

リーダーシップについて、私が考えている所にふれてみたい。

まず言えることは、リーダーシップとは紙に書いてあることを理解することではない。万卷の書を読破したからといって、秀でたリーダーになれるものではない。行動が伴ってこそ初めて具体化するものである。見識や信念を持つことはリーダーシップには基本的に必要なことである。その上で行動力が求められると思う。太平洋戦争初期の連合艦隊司令長官山本五十六は、リーダーについて至言を残している。「やってみせ、言って聞かせてさせてみて、ほめてやらねば人は動か



じ。」というものである。ご存知の方もたくさんいらっしゃると思う。また、竹下登元総理は、「汗は自分がかきましょう。手柄は他人にあげましょう。」と仰っている。けだし名言である。

両者に共通していることは、率先垂範の行動ということである。

人柄の良さだけではリーダーは務まらない。東洋的に言えば、「徳」つまり「人徳」に昇華することが必要とされる。「徳」は中国春秋時代から、人として培うべき資質のひとつとされているが、これには大変深い意味があると思う。「徳は孤ならず、必ず隣り有り」と「論語」にある。これは、徳あるところには必ず援けがあるということである。また、同じ「論語」に「政を徳を以てすれば、北辰のその所に居て、衆星これにむかうが如し」とある。これは、北辰（北極星）が天空の中心にあるように、徳には人が集まってくるということと解されている。これを私流に言えば、すぐれたリーダーシップには必ず求心力が働いているということである。つまり、リーダーシップとは求心力にほかならない。

企業では、社命により組織の長＝リーダーのポストに就くことができる。しかし、「真のリーダー」には仲々なれない。ここに自己を高め、行動力を養うことが求められる所以がある。

21世紀のリーダーには、先ほどの山本長官や竹下元総理の言葉にあるような「やってみせる」ことや、「汗をかく」ことが益々求められると思う。坐してリーダーシップは決してとれないし、真のリーダーにはなれない。

社会の目、社会の風をしっかりとつかみ、肌で感じ、それに対して適切な行動をスピーディーに行っていくことが重要である。

己を高め、行動するリーダーシップを飽くことなく求めていきたいと思っている。